

新しいワクチンが使えるようになりました

2月24日に子ども用の肺炎球菌ワクチンが発売されました。肺炎球菌という最近は多くのお子さんの鼻やノドに常在しています。何かのきっかけ（抵抗力が落ちる等）で以下のような悪さをします。

大人用の肺炎球菌ワクチンは以前から発売されています。インフルエンザウイルス（A、B型）に感染して免疫が落ちた時に、この細菌が二次的に体に入ってきて、肺炎を起こすことが知られています。

高齢者の方はインフルエンザワクチンをうつときに、このワクチンを一緒にうつこともあります。

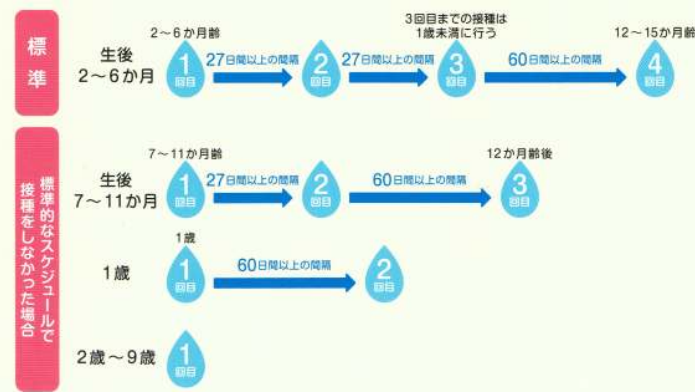
今回は小児用が発売されましたが、肺炎を予防するだけでなく、こわい細菌性髄膜炎にならないために使います。

先に発売されたヒブワクチン（Hib：インフルエンザ菌b型）とこの肺炎球菌ワクチンの2つをうってあげれば、夜間に急な発熱があっても細菌性髄膜炎の可能性が非常に少ないため安心できます（夜、救急病院に走らなくてすみます）。

2000年から定期接種にしているアメリカでは、ワクチンで予防できる肺炎球菌の重い感染症は98%（！）減りました。世界の約100ヶ国で接種され、43ヶ国定期接種扱いです（うらやましい）。

日本では現在のところ、自費扱いです。1回1万円です。

ワクチン接種のスケジュール



※細菌性髄膜炎

発熱、頭痛、嘔吐が有名な3症状です。

細菌性では Hib、肺炎球菌、ウイルス性ではおたふくかぜなどが、この病気を起こします。

一般的に細菌性の方が予後（病気の最終結末）が悪いことが多く、中には不幸にも死亡するケースもあります。

市民病院、大学病院などの入院施設のある小児病棟では毎年入院患者さんがいます。開業医レベルではフォローできない病気なので、この病気を発病したら入院治療となります（少なくとも1～2週間の入院は必要でしょう）。

小児夜間急病センター当番日

3月27日（土）19：30～22：30（受付）

場所：岐阜市民病院にて